

第4回講義 聖書的救いの方法

学習者の目標

- ① このクラスの最後までに、救いの方法と救いの順序の違いについて説明できるようになること。
- ② 贖いの様々な教理を理解する
- ③ 救いにおける「覚醒」「信仰」「悔い改め」について理解する
- ④ ウェスレーの確証の教理を理解する

テキストの要約 藤本満 『ウェスレー』

124頁～128頁

141頁～180頁「信仰による義認」

181頁から218頁 「新生から聖化へ」

前回の復習

原罪により人間は神の像を失っているが、先行する恵みは失われていない。人は恵みに応答して救いの道を歩む。救いは、その意味で、墮落してしまった人間を原初の栄光の姿に回復させることを意味する。ただし、神の像を回復することは、過程を経て行われるもの。(藤本 125頁)

ウェスレーの実践的宗教＝神の恵みによって、人々の魂の中に神の生命が生まれ(beget)保たれ(preseve)、増大していき(increase)、神の生命は外にあらわれて実践的宗教を作り上げる。(125頁)

2つの原則

- ① 救いに関する主権は神 聖霊は神の恵みの先行性を伝えるもの
- ② 聖霊の働きが強制的でなく先行的である限り、そこには聖霊の手動に応じるか/拒否するかという能動的な役割が人間の側に与えられている。

神が罪人を義とみなすことは、キリストの十字架の功績の故に罪人を赦免すること。義認は(1)神の行いであり、(2)御子キリストの贖いの十字架を唯一の根拠としている。人間の努力や功績は、義認を受けるためには全くの無力。(143頁から144頁)
義とされる条件は信仰。義認の信仰は同意ではなく信頼である。恵みに信頼することは神のよって与えられる各賞であり、信仰は賜物であるゆえに瞬時的に与えられるもの。我々は義とされるために信仰という一つの功績を差し出しているのではなく、キリストの功績を自分の上に受け取っている。(147頁)

*ウェスレーは生まれながらの自由意志を否定し、恵みに先立ついかなる人力も否定。先行的恵みによって、道徳的問題に関して意志をもって洗濯し、行動する自由が、ある程度回復されている。(161頁)

- 先行的恵みの役割**
- (1) 人類に道徳的な神の像を回復し、善悪の基準を与えること
 - (2) 刻印された神の律法を認識する良心を備えること
 - (3) 認識された道徳律を実際に選び取り、行動に移す自由意志を備えること。(161頁)

救いは、私たちが生まれた瞬間に与えられる神の自由な賜物である先行する恵みによっ
てはじまります。先行する恵みは、聖霊の臨在と働きです。それは人を神に近づけ、招く
ものであり、私たちの魂が神を求めて覚醒されるものです。私たちは、その時点で、自分
自身の罪深さといかに悲惨な状態であるかを自覚します。

先行する恵みにはさらに3つの働きがあります。以下のようにも考えられるでしょう。

- ① 聖霊は世において活動しているので、私たちが神の真理に導く。
- ② すべての人に与えられている先行する恵みは、イエス・キリストを受け入れることが
不可能な状況において、救いの恵みを供給するもの。
- ③ 先行する恵みは、神の前において私たちの罪の責任を明確にします。

ただし、先行的恵みを義認に新生に至るまでの前段階と単純に考えてはならない。先行的
恵みを享受しながらこの世にただ生きている人と義とされた人物にはギャップがある。目
が開かれる必要がある。それが悔い改め。(163頁)

ウェスレーにおける生きる3つの状態

- (1) 生まれながらの状態 (natural state)
善を選び取ることも、それを実行することも出来ない状態
- (2) 律法の下にある状態 (legal state) 新生を経験する以前の状態
- (3) 福音の下にある状態 (evangelical state) 新生後の状態

悔い改め

ウェスレーにとって悔い改めは、単に心理・感情の綿で悔いて嘆くことではない。真の自
己を認識すること。神の前に罪人であると告白し、それに対する裁きを受け止めること。
もう一つは「傷ついた魂の苦悩」=自己に対する絶望 その意味で先行的恵みの第一目的
は認罪(164頁)

ウェスレーにおいては、魂の覚醒は、悔い改めと密接につながっています。それは「神
が起こす哀しみ」と表現できるものです。私たちの罪のために、神との正しい関係が失わ
れているのですが、深いところでは、神との関係を保ちたいと願っております。悔い改め
は罪を断念し、私たちの生き方を修正することです。ウェスレーにとって特徴的なことは、

この悔い改めの第2の側面は、信仰をもった後にのみ可能であるということです。恵みにより信仰によってのみ第2の意味での悔い改めは可能なのです。

信仰 ウェスレーは信仰については時間をかけて思想を発展させました。モラヴィア派との最初の出会いがウェスレーの救いの理解を代えました。私たちは信仰のみによって救われるのです。私たちは神の義にふさわしくあるために、義を打ち立てるのではないのです。義認は神の自由な賜物であり、信仰もそうなのです。信仰は、神との関係における協働的なものです。この協働主義こそがウェスレー神学すべての基礎です。

確証 ウェスレーの確証の教理も時間をかけて発展してきたものです。ウェスレーのモラヴィア派との出会いは、彼の確証の教理を確かなものとししました。それは、すべてのキリスト者は聖霊の働きと臨在を知覚できるというものでした。これがウェスレーの確信でした。成熟した後期ウェスレーはローマ書に見出される確証を期待すべき一方で、それがなくても救いの信仰を持つことができるとしました。

新生から聖化へ

聖化の転嫁の教理だと、義認の時にキリストの義（聖化）が転嫁され（imputed）、罪が赦されるばかりか、同時に聖化が完了してしまします。それ以降信仰者が聖化を追求する義務もなくなる。（182頁）

ウェスレーはキリストの義と転嫁の問題を神学的に整理し、教理的に緻密な説教（主我らの義）を世に出した。

信仰のみによって働く神の恵みは、罪の赦しばかりか、神の生命に参与する（participation）ことを喚起し、神のとの新しい関係、生きて実現することを可能にし、生活において神の御心と御性質を反映するようになる。（185頁）

新生は、人間の誕生に匹敵する莫大な変化をもたらす。新生の実質的実、常に言葉や行動になって外側の日常生活に現れる。（187頁）

新生は、聖化の開始点であり、その時から完全となる日までいよいよ輝きを増していくもの。かなりの時間とプロセスが必要。新生によって与えられる実質とは聖化の実質と同じ。

救いに付随して起こるもの

義認 義認は神が私たちの為（for）にされる行為 神によって義とされることは、私たちの罪が赦されるということです。

新生（再生） 新生は神が私たちの内（in）にされる行為であり実際の変化 ウェスレーが救いを表現する時に、最も好んで用いる用語は「新生」です。この概念は、私たちが再び生まれること、再生すること、それはキリストにある新しい創造であると考えました。

養子とされること 私たちは家族の中に、キリストにおける兄弟姉妹の共同体の中で生まれることを意味します。

和解 私たちは神と和解しました。神との新しい関係に入ると、罪に含まれていた神からの乖離が克服されるのです。

最初の聖化 救いの瞬間は、義とされたときに起こるのです。

新生は聖化全体の門にあたり、今後聖化という素晴らしい恵みを人は経験していくことになります。

資料6 説教 「主我らの義」を読みなさい。

ウェスレーの引用

まず救いとは何かということについて調べましょう。ここで語る救いとは、しばしば言葉によって理解されてきたものとは違います。救いとは、ただ単に「魂が天国に行く」ということではないのです。また救いは「死の彼岸にある恵み」でもありません。「あなたは救われたのです」それは遠くにあるものでもありません。それが現在におこっていることであり、神のあわれみによってあなたが今経験することができるものです。それは、言語的にも「あなたはすでに救われている」と表現できるものでもあります。ですからここで語っていることは神のすべての業に拡張することができます。それは最初に恵みを受けてから、栄光のうちに魂が完成される時に至るまでのことです。

聖書を神の言葉と信じる者は、そのような真理を疑うことはできません。真理は一度だけでなく、頻繁に、それも明確な用語で啓示されるのです。聖書は荘厳に、神の子の特権を示すのです。「聖霊自らが私たちの霊に、私たちが神の子であることを証ししてください。」説教「救いの証し I I」

聖霊の証し

ウェスレーは聖霊の証による信仰の確証の教理を大切に取扱ました。ウェスレーは自分にあたえられた恵みの状態を確証できると考えました。アルダスゲートの体験以後も、ウェスレーの中にあったのは、頭では罪赦されたことがわかっているにもかかわらず、赦されたことから来る喜びが心の中にあるかどうかということでした。

ウェスレーのアルダスゲート前の理解

1725年、母親への手紙の中で、ウェスレーは「ウィリアム・ローの言葉である、人は自分の救いの状態を確かめることはできないという考えに対抗し、私は今救いの状態にあるかどうかを知ることができると説得された。なぜならば、聖書に、「私たちの誠実な

努力によって救いの状態を知ることができる」と記されており、私たちの誠実を判断することができる」としています。(Letters I 22)

1733年に、説教の中で確証の教理について強い強調を行い、「心の割礼とは、信仰によって神によって生まれる者は、希望によって慰めを受け、自分の中にある聖霊と共に心の中に、彼らが神の子であると証ししてくださることです」としています。(I,9)

1738年1月、人に与えられた聖霊により、人は、疑いから自由にされ、神の子とされ、神の愛が自分の心に溢れたことを知ることができるとしました。

アメリカから帰国して悩むウェスレーに、ペーター・ベラーが確証について語りました。彼はそれを「新しい教理」として語ります。「というのも、その時に至るまで、ウェスレーは確証の条件は、神の僕にふさわしいという意識的なものに他ならない」と考えていたからです。この失敗は、ウェスレーの1725年の信仰による義認の確証が、自分の誠実な努力によって成し遂げられるものと考えたことに起因しました。

そのようなウェスレーでしたが、1738年1月、日誌をみると、確証は聖霊によって与えられ、キリストの功績を私たちが信頼することにより与えられるという意識がめばえてきました。最終的に1738年5月には、ベラーが語るように、確証は、キリストに信頼する者の心に神によって一瞬のうちに記される意識であるとの教えを確信するようになります。

(Collin Williams, John Wesley's Theology Today)

ウェスレーのアルダスゲート後の理解 聖霊の証し

神が信仰者の心の中に働かれるという神による確証

1738年5月24日 「私は、キリストを、キリストのみを救いに関して信頼していると感じた。そして、主が私の罪を、私の罪でさえ取り去り、罪と死の律法から私を救って下さったという確証が与えられた。」と語ります。

その後の表現が重要です。「私は全力を尽くして、特別な作法で私をみくだしながら利用し、迫害した人々のために祈りはじめた。私はそこにいるすべての人のために、私が最初に感じたことを証しし始めた。すると敵がすぐに「これは信仰ではありません。喜びはどこにあるのですか」と示唆し始めた。それから私は、罪に対する平安と勝利は、救いの主にとって本質的なものであると教えられた。特に深い嘆きを持っていた人々にとっては喜びを移されることは、その最初であり、神はしばしば、自分の意志によって与え、引き止められるのです。」と語っています。

2つの永遠の賜物とは

- (1) 平安、信頼、キリスト、キリストのみを救いのために完全に信頼すること
- (2) その結果 罪に対する勝利

ウェスレーは、美德のみを強調しすぎる神秘主義に脅威を感じるようになりました。それは、救いの確証のために自分の聖性のみを信頼するものでした。詩と賛美歌集の序文で、彼は神秘主義者を攻撃します。

「私たちは、彼らが異なるものに基礎を置いていると理解します。彼らは自分自身のわざを否定し、律法の行いによっては、どのような人も義とされたいことを証しします。しかしなぜそうなのでしょう。それは、自分自身のわざにおいて自分自身の義を建て上げることになるからです。彼らはどこにおいても、自分の徳のある行為によって神に受け入れられることを期待することに対して反対し、徳による習慣や性質によって受け入れられるべきであると主張します。しかし、その場合、依然として私たちが受け入れられる基礎は自分自身の中にあるのです。本来、私たちの中にある内的、外的な義は義認の基礎ではないのです。「心のホーリネス、生活のホーリネス」は原因ではなく、その結果なのです。神に受け入れられる唯一の要因は、神の律法を成就し、私たちの身代わりとなって亡くなられたキリストの義と死によるのです。そしてその条件は（彼らが考えるように）心と生活の私たちのホーリネスではありません。信仰は、ホーリネスやよきわざからは区別されるのです。他のものの上に人は基礎を置くことはできません。信仰は両者を生み出すものであり、よきわざもホーリネスも含んではいません。

(Works , XIV, 332-333.)

ウェスレーはここで、ルターの言う「自己の経験から解放された体験」について議論しています。「信仰は愛を形成しますが、反対はありません、心と生活のホーリネスは義認の根拠ではなく実なのです」(William op.cit., p.107)

さらに、ここには、それ以上のものが含まれています。福音の大きな真理は、義認は、私たちの外なる義であるキリストに依拠しており、福音がもたらす平安は、この世が決して与えることができず、取り去ることもできないものです。なぜなら、それは人間の外からくるものだから。それは私たちに語られた事によってもたらされるものであり、決して私たちの中にある心理学的に分裂した感情ではないのです。

聖霊の本質

ウェスレーは鍵となる聖書の箇所は、ローマ8章16節です。「この霊こそは、わたしたちが神の子どもであることを、わたしたちの霊と一緒に証ししてください。」この箇所は2つの証しを伝えています。

- (1) 神の直接的な霊の証し
- (2) 従順な信仰者自身の霊の証し

ウェスレーはローマ8章16節の「同じ霊が、わたしたちの霊と一緒にあって証しして下さる」つまり、自分自身の霊とは異なる証しによって、真実の信仰者の霊とともに、良心の証しによってなして下さるのです。このことに関して確信があり、ぶれない人は何と幸いですでしょう。と語っています。

神の霊の証し

「聖霊の証しは、魂に生じる内的な印象であり、神の霊が直接、私の霊に、自分が神の子であると証しして下さる事です。イエス・キリストが私を愛し、ご自身を与えて下さるというものです。私の罪は完全にぬぐいさられ、私、私でさえ神と和解できるというものです。」

「さて、私たちは、神が私たちを愛しておられると知るまでは神を愛せません。主の聖霊が私たちの霊に対して証しされるのでなければ、赦しの愛を知ることはできません。それ故に、主の霊の証しが神に対する愛、すべての聖性の前に存在しなければなりません。その結果は、私たちの内的な良識やそれに対する私たちの霊の証しの前に先立つものでなければなりません。

(聖霊の証し I; I, 7-8)

現代的な用語を用いれば、クリスチャンは、神の霊によって把握されていることを認識しています。それによって、感情をこめた応答をもたらすことができるのです。しかし、この経験は、自己を正しく表現することを可能にする経験であり、それを受け取っていない人は明快には述べることはできません。しかしながら、その証しが純粋なものであるかを検証する聖書的な検証があるのです。

(コリン・ウィリアムス John Wesley's Theology Today, p.110)

信仰者の霊の従順な証し

「聖書は、もっとも明快な方法において述べる事ができるしるしに満ちています。以前より存在して、主の霊の証しに伴い、また主の霊の証しの後に続くもの、神の霊に対する信仰者の霊の証し」は、つまり

- a 悔い改め、罪の自覚、赦しの証しの前に存在するもの
- b 「広く、力強い変化、暗闇から光り、サタンから神の力への変化、死から命へ至る復活の自覚
- c 御霊の証し、主にある喜び、謙遜さ、穏やかさ、忍耐、やさしさ、忍耐強さ、言葉で表現できないような魂の柔軟さ。
- d 聖書は、これが神の愛、私たちが命令を守っているという真実のしるし (聖霊の証し I, II, 3, 4, 5, 6, 7) と語っています。

説教 I I の同じ主題においてウェスレーは上の 2 つの聖霊の証しを、聖書の証しの中に基礎をおいていると語ります。

聖霊の証しとは何でしょうか。原語は *martyria*、それは、(幾つかの箇所)で証し、または、「証拠」「記録」を意味します。それも私たちの聖書に訳されています。(ヨハネ 11 章)「これは記録、靈感を受けた書物に証しされている要約」であり「神は私たちに永遠の命を与え、その命は彼の子のもの」(II-1)とするということの意味するのです。

聖霊の直接的な証しを上(説教 I, 7)で語った後、彼は「間接的な証し」を、「神に対する良心の証し」と同等視しています。それは理性を持っている結果、私たち自身の魂において感じる熟慮と考えることができるものです。厳密に言えば、それは部分的には神の言葉からとられた結論であり、部分的には私の経験から生まれた結論です。神の言葉は、御霊の実を持っている者は誰でも神の子であると語り、私たちの経験、内的な良心は、私が御霊の実を持っていると語っています。それ故に、私は合理的に以下のように結論します。「それ故、私は神に子である」と。(Ibid., II, 6)

聖霊の証しの範囲と程度

ウェスレーにとって、聖霊の証しは、キリスト者の経験の全体的な基礎をカバーするものです。聖霊の働きの各段階、義認だけでなく聖化に至るまで、同じ聖霊の証しによって正当化されるのです。聖霊の証しの教理は、聖書の固い基礎の上に成り立っています。「神によって自由に与えられた教理」であることを知るので。(I コリント 2 章 12 節)

キリスト者の完全の平易な説明においてウェスレーは

「質問 16 あなたは、聖化されたと、内側にある崩壊から救われたとどのように知ることができますか」

「答：私は自分が義とされたことを何よりも知ることができます。ここに、私は自分が神の子とされたことを、両方の意味において「私に与えられた聖霊によって」知ることができます。聖霊の証しと実において知ることができるのです。まず第 1 に、証しにおいてです。私たちが義とされた時に、聖霊が私たちの霊とともに、自分たちの罪が赦されたことを証しするのです。私たちがきよめられた時に、罪が取り去られたと証ししてくださるのです。」

それは、以下の有名な聖書箇所において同じことが意味されているのではないのでしょうか「聖霊それ自体が、私たちの霊とともに、神の子であると証ししてくださるのです」ローマ 8 章 16 節 彼らはもっとも低い意味で神の子であると証しするのでしょうか。いいえ、もっとも高い意味で行われるのでしょうか。それを疑う何の理由があるのでしょうか。(Works, XI, 420-421)

ウェスレーは確証を3つのステージに区分けしました。

1. **疑いと恐れと混じり合った信仰の明確な確信**であり、クリスチャンの共通の特権であるとされているもの。(Letters III, 137-139, 161-162; V:358)
2. **信仰の全き確信** 完全な赦しの確信はあるが、疑いや恐れによってぼやかされているもの (Letters, II, 192; III 161-162, 305; IV, 170; V, 358; VI, 323; VII, 57-58)
3. **希望の完全な確信** 未来の栄光への確証 (Letters, V, 358; VI, 323, VII 57-58)

聖書注解の中で、ウェスレーは、「希望の確信」(ヘブライ6章11節)を以下のように語っています。

「信仰の全き確証は、現在の赦しと関連しています。希望の全き確信は未来の栄光と関連しています。」前者は、神が私と神の子の愛において和解してくださったという神の証しを示し、後者は、同程度の神の証(聖霊の瞬間的な靈感によって魂に記された)、先行する恵み、永遠の栄光を意味します。

信仰の確信は、希望の全き確証の違いは、聖書に書かれています。(エフェソ6章17節の注解を見よ)彼は、信仰の確証を、すべての信仰者の特権であると語っています。この上からの証しが欠けていることは、がっかりしたり、恐れたりすることの原因ではありません。というのも、よきわざを私たちの内ではじめられた方は最後までそれを完成させてくださることを知っているからです。主の霊において、赦しと子としてくださる確信を示してくださる方は、最後まで私たちが全うしてくださるものをもっておられるのです。」

確証をキリストを信じる信仰によって神が心のうちに働いて起こしてくださる変化。(藤本 203頁)

ウェスレーのこのような考え方は、英国教会からみれば熱狂主義とうつり、ウェスレーは英国教会の説教壇から閉め出されます。

ウェスレーは聖霊の確証が熱狂に至る危険性を感じ、常に聖書という啓示の客観的尺度、また〈直接的な確証〉と思われるものを理性を用いて客観的に検証し、確証が独断的思い込みや妄想でないことを明確にすべきことを教えています。(藤本 207頁)

ウェスレーの目標は、理性主義者と、熱狂主義者の中道を歩む事。(208頁)

資料7 説教 「聖書における救いの道」を読みなさい。